

## 浦上天主堂

浦上天主堂には悲劇的な歴史があります。多くのキリシタンがいた浦上地域では、18 世紀後半から 19 世紀後半にかけて繰り返し大規模な摘発が行われ、キリシタンたちを苦しめました。1865 年、浦上からやってきた女性が、長崎の大浦天主堂でベルナルド・プティジャン神父に日本の潜伏キリシタンの存在を明らかにしました。皮肉なことに、これを受けてプティジャン神父とパリ外国宣教会の仲間たちが行った宣教活動は、3,000 人以上の浦上キリシタンが日本各地に流刑にされた最後の弾圧「浦上四番崩れ」の引き金となりました。

1873 年にキリスト教が解禁されると、無事に帰郷した浦上キリシタンたちは礼拝を行える教会を求めました。当初は仮の教会を設けていましたが、1895 年、ピエール・テオドール・フレノー神父の指揮のもと、石の装飾が施された赤煉瓦造りのロマネスク様式の教会の建設が始められました。資金不足に悩まされ、信徒たちはこの天主堂を建てるのに 20 年間を費やしました。天主堂はフレノー神父が亡くなってから 3 年後の 1914 年ようやく献堂されましたが、2 つの鐘楼が完成するまでには、さらに 11 年の歳月がかかりました。完成当時、浦上天主堂はアジアでも最大級の教会でした。無原罪の聖母教会という正式名称を持つ浦上天主堂は、カトリック長崎大司教区の司教座聖堂です。

この天主堂の建設地には、250 年間にわたって踏絵で地域のキリシタンたちにキリストと聖母マリアの絵板を踏むことを強制した庄屋の屋敷跡があえて選ばれました。悲しいことに、この場所は 1945 年 8 月 9 日に長崎に投下された史上二発目の原子爆弾の爆心地から数百メートルしか離れていませんでした。教会の左を見ると、吹き飛ばされた北塔の鐘楼が小川のすぐ上に横たわっています。もともとあった 2 つの鐘のうち 1 つは爆発を耐え抜き、現在でも使われています。

破壊された天主堂は 1946 年に木造に建て直されました。現在の鉄筋コンクリート造の建物は 1959 年に完成しました。1981 年にここでミサを行った教皇ヨハネ・パウロ 2 世の訪問を控えて 1980 年に外観がレンガタイルで覆われました。浦上天主堂は 1,000 人の礼拝者を収容できます。

原爆の痕跡は鐘楼の残骸だけではありません。頭部が焼け焦げた聖母マリアの木像もそのひとつです。実物は教会の手前にある小聖堂に保管されており、観光客はここには立ち入ることができませんが、教会の奥に置かれているレプリカを見ることができます。教会へと続く道の左側にある原爆で燃えて損壊した像の数々はもとの天主堂に置かれていたものです。その反対側には原爆資料室があり、被曝した信仰具が展示されています。

教会に面した庭園には山口県産の萩で使われた「拷問石」と呼ばれるものがあります。萩は浦上四番崩れ（1867-1873）の際に浦上キリシタンが流された土地のひとつでした。キリシタンたちはこの石の上に正座させられ、命を失うか棄教するまで野ざらしにされました。